

こえに だして よみましょう。

いちようの実 ^み ②

みやざわけんじ
宮沢賢治

「ぼくなんか落ちるとちゅうで目がまわらないだろうか。」
一つの実 ^み がいいました。

「よく目 ^め をつぶっていけばいいさ。」も一つ ^{ひとつ} が答 ^{こた} えました。
「そうだ。わすれていた。ぼく水 ^{すい} とくに水 ^{みず} をつめておくんだ
った。」

「ぼくはね、水 ^{すい} とうのほかにはつか水 ^{すい} を用意 ^{ようい} したよ。すこしやろうか。旅 ^{たび} へ出 ^で てあんまり
心持 ^{こころもち} ちのわるいときはちよっと飲 ^の むとい
っておっかさんがいったぜ。」

「なぜおっかさんはぼくへはくれないんだらう。」

「だから、ぼくあげるよ。おっかさんをわるく思 ^{おも} っちゃすま
ないよ。」

そうです。このいちようの木 ^き はおおかあさんでした。
ことしは千人 ^{せんにん} の黄金色 ^{きんいろ} の子 ^こ どもが生 ^う まれたのです。

